慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴジラとアトム/主要研究資料
Sub Title	Selected bibliography
Author	海老原, 豊(Ebihara, Yutaka) 宮本, 道人(Miyamoto, Dojin)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2012
Jtitle	Booklet Vol.20, (2012.) ,p.116- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Godzilla and Astro Boy 5
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000020-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴジラとアトム／主要研究資料

海老原豊・宮本道人編

以下の一覧は、日本における２大原子力キャラクター・アイコンのゴジラ・アトムについて論じている文献を集めたものである。ゴジラ・アトムの表象と、日本の歴史社会的状況との関連を論じているかどうかが選考基準で数多くある作品ガイドは極力のぞき、本書に収録されている論文中で参照されたものでゴジラ・アトム表象に関連しているものは載せてある。便宜的に「ゴジラ文献」と「アトム文献」に分けたが、文献によってはゴジラもアトムも論じているものもあり、厳密に分けられるわけではない。なお、同じ著者の論文でも、改稿を考慮して雑誌掲載のものと単行本になったものの両方に言及している場合がある。

［凡例］

書籍

著者名『書籍名』出版社、出版年月

論文

著者名「論文名」『雑誌名』通号、出版社、出版年月、頁

＊文献は著者名順

（著者名・編集者名が明記されていない雑誌などは著作名順）

ゴジラ文献

猪俣賢司「南洋史観とゴジラ映画史 ── 皇国日本の幻想地理学と福永武彦のインファント島」『人文科学研究』123 号、新潟大学人文学部、2008.10、81-111

岩田功吉「ゴジラは帝都にやってくる（上）破壊の思想空間」『専修人文論集』72 号、専修大学学会、2003.3、41-74

梅木達郎「トラウマ・フラッシュバック・ゴジラ ── ナショナルな想像力についての一試論」『ユリイカ』31（6）号、青土社、1999.05、192-210

小野俊太郎『モスラの精神史』講談社、2007.7

「学問的ゴジラ」『科学朝日』54（1）号、朝日新聞社、1994.1、6-15

加藤典洋「特別評論　グッバイ・ゴジラ、ハロー・キティ」『群像』62（4）号、講談社、2007.4、176-189

加藤典洋『さようなら、ゴジラたち ── 後から遠く離れて』岩波書店、2010.7

加藤典洋『3.11　死に神に突き飛ばされる』岩波書店、2011.11

笠井潔『例外社会』朝日新聞出版、2009.3

笠井潔・巽孝之編『3・11 の未来』作品社、2011.9

香山滋『ゴジラ』筑摩書房、2004.11

川崎市岡本太郎美術館企画・編『ゴジラの時代』六耀社、2002.4

川本三郎『今ひとたびの戦後日本映画』岩波書店、2007.7

川村湊『原発と原爆 ── 「核」の戦後精神史』河出書房新社、2011.8

木下昌明「映画から見えてくる世界（第 42 回）日本の戦後と原発 ── 『ゴジラ』から『100,000 年後の安全』へ」『東京』325 号、東京自治問題研究所、2011.6、22-25

切通理作ほか『日米ゴジラ大戦』青弓社、1998.7

草間朋子・桂文珍「放射能と“ゴジラ”の困った関係（桂文珍の『もうちょっと奥が知りたい』）」『潮』391 号、潮出版社、1991.10、229-241

小松左京「拝啓イワン・エフレーモフ様」巽孝之編『日本 SF 論争史』勁草書房、2000.5、42-55

『COMIC BOX』69 号、ふゅーじょんぷろだくと、1990.1 号

佐藤健志『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』文芸春秋、1992.7

佐藤健志「ゴジラはなぜ日本を襲うのか ── 『水爆怪獣』～『VS キングギドラ』の国防心理」『諸君！』24（2）号、文藝春秋、1992.2、166-177

サーフライダー 21 編『ゴジラ生物学序説』扶桑社文庫、1988.7

武居克明「エンジョイ・サイエンス 超反響！ ── ゴジラ学の最期」『科学朝日』54（3）号、朝日新聞社、1994.3、26-35

武居克明「ゴジラ生物学序説批判 ── 分類大系に『霊竜綱』を提案する」『科学朝日』54（1）号、朝日新聞社、1994.1、7-11

武田徹『私たちはこうして「原発大国」を選んだ　増補版「核」論』中央公論新社、2011.5

武田徹「特別講演会　日本ポップカルチャーの実力 ── ゴジラ、鉄腕アトム、風の谷のナウシカ」『恵泉アカデミア：恵泉女学園大学社会・人文学会機関誌』（12）号恵泉女学園大学人文学会、2007.12、3-29

但馬オサム『ゴジラと御真影 ── サブカルチャーから見た近現代史』オークラ出版、2009.12

Tatsumi Takayuki, *Full Metal Apache: Transactions Between Cyberpunk Japan And Avant-Pop America*（*Post-Contemporary Interventions*）Duke UP, 2006.6

田畑雅英「なぜゴジラは都市を破壊するのか」『都市文化研究』（5）号、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、2005.3、16-29

高橋敏夫『ゴジラが来る夜に 「思想としての怪獣」の 40 年』広済堂出版、1993.12

高橋敏夫『ゴジラが来る夜に 「思考をせまる怪獣」の現代史』集英社、1999.11

高橋敏夫「ゴジラと高度経済成長 ── 『ゴジラが来る夜に』と時代」『國文學』46（13）号、學燈社、2001.11、117-121

高橋敏夫『ゴジラの謎 ── 怪獣神話と日本人』講談社、1998.8

ウィリアム・M・ツツイ著、神山京子訳『ゴジラとアメリカの半世紀』中央公論新社、2005.10

土佐朋子「『ゴジラ』の力 ── 科学技術と戦争」『東京都立航空工業高等専門学校研究紀要』（43）号、東京都立航空工業高等専門学校、2005、63-71

中子真治『超 SF 映画』奇想天外社、1980

中沢新一「GODZILLA 対ゴジラ ── ゴジラを再解釈した西欧の原理・背後に浮上する日本の神話的思考」『新潮』95（9）号、新潮社、1998.9、220-242

中沢新一「ゴジラの来迎 ── もう一つの科学史」『中央公論』98（14）号、中央公論新社、1983.12、78-93

長山靖生『近代日本の紋章学』青弓社、1992.11

Martha Batter. *The Way to Ground Zero: The Atomic Bomb in American Science Fiction*. New York: Greenwood, 1988.

橋本章彦「ゴジラ・顕在する異界 ── 深層を支える民俗的世界観について」『河南論集』（7）号、大阪藝術大学藝術学部文藝学科研究室、2002.3、89-112

花田俊典『沖縄はゴジラか 「反」・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア』花書院、2006.5

花田俊典「沖縄はゴジラか ── 吉本隆明の南島論のスタンス」『日本文学』50（1）号、日本文学協会、2001.1、48-57

原田実『怪獣のいる精神史 ── フランケンシュタインからゴジラまで』風塵社、1995.2

樋口尚文『グッドモーニング、ゴジラ ── 監督本多猪四郎と撮影所の時代』国書刊行会、2011.6

ミック・ブロデリック著、柴崎昭則・和波雅子訳『ヒバクシャ・シネマ ── 日本映画における広島・長崎と核のイメージ』現代書館、1999.8

『別冊宝島　怪獣学・入門！』JICC 出版局、1992.7

ピーター・ミュソッフ著、小野耕世訳『ゴジラとは何か』講談社、1998.7

本浜秀彦「1972年前後のオキナワ表象――手塚治虫・ゴジラ・ウルトラマン」『ユリイカ』33（9）号、青土社、2001.8、230-237

好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆 特撮映画の社会学』せりか書房、2007.11

吉田義昭「『リトルボーイ』と『ゴジラ』」『詩学』61（10）号、詩学社、2006.11、72-75

アトム文献

朝日新聞社、手塚プロダクション編『鉄腕アトムの軌跡展――空想科学からロボット文化へ 1900-200X』朝日新聞社、2002.4

伊藤憲二「『エフ氏』と『アトム』――ロボットの表象から見た科学技術観の戦前と戦後」『年報　科学・技術・社会』12号、アイ・ケイコーポレーション、2003、39-63

大塚英志『アトムの命題――手塚治虫と戦後まんがの主題』徳間書店、2003.4

大塚英志「日米講和と『鉄腕アトム』――手塚治虫は何故『アトム』を武装解除したか」『環――歴史・環境・文明』22号、藤原書店、2005.Sum、178-189

大野晃『手塚治虫・〈変容〉と〈異形〉』翰林書房、2000.7

柏木博「戦後社会の異人とテクノロジ――鉄腕アトムの50年」『すばる』12（12）号、集英社、1990.12、290-293

草柳大蔵「国民の"偶像"の移り変わり――フジヤマのトビウオから鉄腕アトムまで――特集・国民のなかの戦後史」『潮』62号、潮出版社、1965.8、282-290

佐倉統「人間にとってロボット（あるいは鉄腕アトム）とは何なのか？――フランケンシュタインと醜いアヒルの子」『人工知能学会誌』98号、人工知能学会、2003.3、145-152

佐藤忠男「新しい人間としてのアトム」『ユリイカ』15（2）号、青土社、1983.2、54-59

鈴木志郎康「時代に投げ出されたアニミズムのアマルガム――『鉄腕アトム』論」『ユリイカ』15（2）号、青土社、1983.2、70-77

竹内オサム『手塚治虫論』平凡社、1992.2

武田徹『「核」論――鉄腕アトムと原発事故のあいだ』勁草書房、2002.11

手塚治虫、合田周平「鉄腕アトムが予言していた夢――ニューメディア――技術と感性のふれあい」『中央公論』99（10）号、中央公論新社、1984.10、146-152

なかはらかぜ「手塚治虫の遺伝子――鉄腕アトムの心」『徳山大学論叢』（71）号、徳山大学経済学会、2010.12、251-270

藤川治水「鉄腕アトム論」『思想の科学　第5次』19号、思想の科学社、1963.10、74-92

布施英利『鉄腕アトムは電気羊の夢を見るか』晶文社、2003.3

村瀬ひろみ「日本のアニメにおける環境意識の変容――『鉄腕アトム』から『もののけ姫』まで」『社会分析』25号、日本社会分析学会、1997、45-58